

会議議事録(抄)

会議名	2025年度専門学校東京テクニカルカレッジ 第二回データサイエンス系教育課程編成委員会
開催日時	2025年12月5日(金)15時00分～17時00分
会場	専門学校東京テクニカルカレッジ 地下1階テラホール、11階1103教室
参加者	<外部委員:4名> (順不同・敬称略、役職は委員名簿参照) 北川 淳一郎(LINE ヤフー株式会社/データサイエンティスト協会スキル定義委員) 坂本 一憲(WillBooster 株式会社/早稲田大学研究員客員准教授) 佐藤 周平(株式会社セラク) (欠席)ポール・リー(Terakoya.AI) <内部委員:1名> 金井 伸也(専門学校東京テクニカルカレッジ データサイエンス+AI 科科长) <オブザーバー:1名> 鈴木 健太(専門学校東京テクニカルカレッジ データサイエンス+AI 科)
	<系別分科会>(第二部) 1.議長挨拶 金井より挨拶 2.前回(系別分科会)議事録の確認 3.意見交換
討議内容	■3 学期以降の近況報告 + 学習状況 金井:1 年生は留学生を中心に科目合格の割合が低下している。成績は上位層と下位層で二極化しており、上位層は全体の3割、7割が下位層に位置する。成績不振の主要因は日本語理解力の差にあると考えている。 2 年生は日本人学生で退学、休学が発生。留学生は、半数が不合格科目を多く抱え、再履修も進んでいないので卒業が危ぶまれる状況にある。 鈴木:1 年生の成績下位層は基礎的な PC 操作に不慣れなことも要因。日本語入力、ファイル管理、検索などの操作が遅いので授業の進行から遅れてしまう。休暇期間中に自主的に PC を使う習慣が無いためか、休みを挟むと基本操作ができなくなる。この傾向はミャンマーの留学生に多い。 + 就職状況 金井:3 名が内定取得済み(高卒進学2、留学生1)。社会人は中途採用枠での就活になるので、これから結果が出てくる。 + RJP 活動内容 金井:課題解決型学習ではビジネスコンテストやアイデアコンテストへの参加を中心に進めている。最終選考に残るなどの成果も出ている。 + 近況報告に対するコメント。留学生の入学基準の見直しや入学前教育が必要 佐藤:留学生の入学試験の合格基準が曖昧で授業で求められるレベルとのギャップが問題。基準を見直すべき。日本滞在が目的で来ている人と学びにモチベーションを持って面接に来ている人を面接で見抜けていないのも問題。入学者のレベ

ルを担保したいのであれば、現在の入学試験に加えて IT リテラシーや論理的思考力に関する基準を、試験に追加・強化したほうがいい。

北川：厳しくスクリーニングすることで入学者が減る懸念はあるかもしれないが、学校のレベルの低下が中長期的に学校経営にプラスになるのか疑問。学生の学力の二極化を受け入れていくなら上か下のどちらに合わせていくか見直し、カリキュラムの改定も必要。もしくは、クラスを分けて授業を行う。

坂本：厳しいスクリーニングだけでなく、留学生に特化した入学前教育も実施すること。入学前教育プログラムを有償で提供し、ビジネスとして成立させることも検討してはどうか。

■AI 教育の全学的導入について

金井：AI を教育にどう導入すべきか、特に LLM や生成 AI などの最新技術をどこまで教えるか、また、従来のプログラミング教育の必要性をどう見直すべきか。

+ ドメイン能力×AI 活用力。片方でも 0 なら不要

佐藤：AI を使いこなすには、どんな場面であれ使用制限を設けることなく積極的に使ってもらうように働きかけること。AI ツール利用の PDCA を回し、使い方を体得していく必要がある。学校全体としては AI をすべての場面で導入していくべき。

データサイエンティストを目指す学生には、ツール利用だけでなく原理の理解も必要。原理の理解が賢い AI ツールの活用につながる。AI ツールを使う一般事務員や作業者を監督する立場としてのニーズもある。今後、AI で何をすべきかを素早く判断する管理・監督立場が重要になると考える。

北川：AI の利便性は十分に膾炙し、AI の活用が実現している中で、AI 教育を掲げて AI の何を教育したいと思っているのか疑問。

AI の活用範囲の拡大とともに、AI の適用可能範囲の理解が進まず AI でできないことを AI で何とかしようとする無駄の発生がみられる。AI の適用範囲の境界を知り、AI を選択肢として事業やプロジェクトの意思決定につなげられるようにしていくことは必要。「AI がデザインを出来るからデザイナーが不要」ではなく、デザイナーが AI を活用して何ができるかを考えられるようにする必要がある。コアの技術を持った人が AI でできることを考えることが大切。

AI サービスにはインプット、アウトプット量の制限があり、その制限を超えたプロダクトは作れない。AI サービスの制限に直面したとき、AI のアウトプットから再構成したプロダクトが本人の能力以上のものになることは無いから、今まで以上にドメイン知識の理解が必要。並程度の仕事は優秀な人が指示する AI で片付くからそこに人は要らない。既存の社員が適切に AI を使いこなしているような企業では、エンジニアに限らず AI に代替可能な職種は新卒枠を減らす方向に変化している。

坂本：仕事の整理をする能力が求められている。AI への的確な指示ができれば、遂行は AI で完結可能な部分も多い。

+ AI 教育を求める層に AI は使いこなせない

坂本：仕事の整理にはその仕事への深い理解が必要で、優秀な人は AI によって生産性が飛躍的に向上しているが、普通の人がそれに対抗するのは非常に困難だと考える。普通の人に AI 教育をしても仕事の整理ができないなら教育がコストでしかなく需要が無い。経営者目線では低レイヤーの技術者は負債とすら考えている。AI 教育を求めているレベルの人では、企業が求める高生産人材にはなれない。ビギナーが一線級の活躍を目指すなら AI やドメインの勉強だけでも相当なのに、学校で勉強のモチベーション管理とかメンタルとか言っているようでは追いつけないのが現状。できるひとは自分で学んでくる。

北川：誰でも AI ではなく、AI を専門的に行う人と、AI に代替されない分野を選ぶことの二極化が戦略として大事になってくるのではないか。AI を使っていきたいのであれば 1 日 18 時間勉強するくらいの想いと覚悟が必要。厳しい現実をもっと直視したほうがいい。

■DS 協会のスキルチェックリストの改訂に対するカリキュラム対応

金井：DS 協会のスキルチェックが見直されたことを受けてカリキュラムにどのように反映させていけばよいか。

+ 価値創造へのシフトが求められるが要求能力は今以上に高い

北川：これまでのビジネス力領域が大きく見直された。既存のビジネス力はデータサイエンティストだけでなく広く社会人に求められる能力であり一般常識だった。そこで今までビジネス力は基盤スキルとし、データサイエンティストに求められるビジネススキルとして価値創造が定義された。データサイエンティストには、単に課題を解決するだけでなく、課題を発見・定義するという高い要求が課されており、タスクリストでは AI で何ができるかを常に考え続けることが重要視されている。

どのレベルの人材育成を目指した教育をするか検討し直す必要がある。今のレベルでさえ半分以上が単位を落としているような状況で、価値創造できるレベルの人材育成は難しい。

+ 入学する学生のレベルに見合ったカリキュラム内容への見直しが必要

北川：企業が AI 導入を進める理由には生産性向上があり、生産性向上を目指せば AI による代替によって人員削減と進むため、今後は就職難が予想される。ますます留学生には厳しい状況になる。

社会人のリスキリングプログラムでさえ月曜～土曜まで毎日 6 時間くらい研修するプログラムもある。AI を学ぶつもりなら圧倒的に学習時間が足りていない。

スキルチェックリストに学生が追いつけないなら無理にカリキュラムをスキルチェックリストに合わせず、もっとレベルを下げた授業を主体として、やることも 1 つだけに絞って 1 つだけでも就職でアピールできる武器を持たせた方がいい。

佐藤：AI や IT 業界は今後、本当に優秀な人以外の新卒採用は絞っていくようになる

	から、AI で代替できない人手が必要な業種へのコネクションが保険になる。 以上
--	---